＜今朝の聖書から＞

【私たちと同じ】この小見出しは先週と同じになります。“家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた（2：11）”とある姿が私たちと同じなのです。普通の人達よりは貧しい姿だったかもしれません。東方の博士たちと呼ばれる人たちが、この姿に“彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた（2：11）”のです。昔から沢山の教会の画家がこの光景を想像し、絵にして説明しようとしてきました。ピーテル・ブリューゲルの油絵や、ボックホストのものなどが“東方の博士たちの礼拝”を描いています。まず、これらの絵画は、美しい花の絵などとは異なり、これは一体何の光景なのか、おそらく聖書の出来事を知らない人々には、理解できない絵になっています。天上に天使の姿を配してみたり、いろいろと工夫はしているようですが、あえて豪華絢爛に描こうとすればするほど、マタイの記録とは違うものになっていくようです。そして面白ことなのですが、筆づかいがどうとか、光の捉え方がどうとか、絵画の専門家によるコメントは、これを見て聖書を思い出す人々には、あまり意味のない説明になっています。いずれも主イエスにあてられた光で描かれています。暗い雲の立ち込める下で、幼子主イエスが輝いているのです。

【公現】この時を公現日として、クリスマスの中心をおく教会があります。東方教会に属する教会の一部が、今もそのようにしています。１月６日になります。それでは誰に対して公に現れたのでしょうか。“全世界に”といって良いのですが、直接には東方の博士たち（あるいは占星術師たち）に対してなのです。星や天空の動きに神の意志を見ようと考えていた拝火教（はいかきょう）であるゾロアスター教の占い師たちであったろうなどと、語られます。でもはっきりしたことは分かりません。間違いないのは、聖書の民ユダヤ人ではなかったということです。

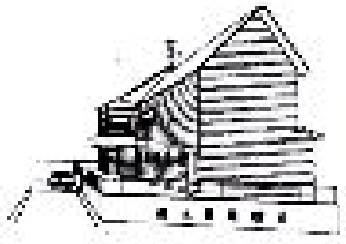
【権力闘争】先にヘロデ王のことについてはみましたので、ここでは触れませんが、ローマ帝国の属国であり、限られた権威を信仰の名によって、すなわちイスラエルの名によって与えられていたヘロデの時代は、社会的にも不正義がまかり通り、威圧の時代だったでしょう。更にそれが信仰と律法の名において行われていました。抜け道のない閉塞状況が、人々を覆っていたように思えます。ここに心に留まる一つの説明があります。３節に“これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった”とあることです。王にまで上り詰めた権力者だけではなく、住民と記されている沢山の人達もそうだったというのです。荒廃した社会の中では、正義感を持って主義主張のために戦おうとする人々、そして静かに隠とんの生活を送ろうとする思いが心に宿ります。またベツレヘムの民がそうであったように、苦しい中でも何とか生き延びる知恵に頼ろうとする姿です。この姿はどうしても変化を恐れ保守的になろうとします。なぜなら作った社会的基盤に頼ろうとするからです。実際そうだったでしょう。ヘロデの思いも、民の思いも同じだったというわけです。この姿を新約聖書は、律法学者やファリサイ派の人々の行いを通して充分に説明しています。救いが見えなかったのです。見えなくなってしまっていました。

【預言の成就】旧約聖書に精通している律法学者たちは、他人ごとのようにミカの預言を語ります。ミカ５：１に“エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたし（主）のために、イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる”とあります。“救い主はどこから現れるのか？”とういう博士の問いに対する回答がこれでした。

【神の子イエス】救い主は、人として関わるために、人の中にお生まれになりました（先週の週報）。更に救い主を信ずる人々に現れました。 私たちとも生活を共にして下さいます。信じる者に示され、信じない者には隠されているのでしょう。第一ヨハネ５：10に“神を信じない者は、神を偽り者とする”とあります。

週　報

２０１０年　１２月　２６日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☎054-345-4070　　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042